

# 怪我の功名

辻 惟雄

アンドレ・マルローが来日の折、世界の名画と絶賛した神護寺の源頼朝像・平重盛像が、定説より一世紀下の南北朝時代の足利尊氏・義直像だというショッキングな説が、一九九五年米倉勉夫氏より出され、大きな話題となった。私のような年輩の美術史家の多くは反対にまわり、支持したのは若手の美術史家たちと歴史家だった。この説の是非を問うシンポジウムが開かれ、私も出席した。細かなことは覚えていないが、絵絹の編み状態が南北朝期のそれと似ることを根拠に米倉説を支持する泉氏の報告に対し、私が、「都合の良いスライドだけを使っている」などと意地の悪い発言をしたようだ。以前東北大にいたときの優秀な教え子に対し何たる仕打ち、と深く反省しているが、今でも私は頼朝・重盛像を南北朝でなく鎌倉後期に置ければ、と思っている。

ともあれ泉氏は、私の思わぬ発言に対し、より詳細な説明ないし論述が必要だと感じた。その時の出席者たちからも刊行を助言され、それが今回の、基底材としての絵絹の編みの状態を通史的に精査し作品の時代判定に役立てる、という画期的な研究書の出版につながった。とすれば私の発言も怪我の功名、教師冥利につきることだ。

## 目次

はじめに

### 第一部 総論

#### 第一章 平安時代の絵画の絹目

- 一、平安時代前半から半ば（九世紀～一〇世紀）
- 二、平安時代後半 第一区分（一一世紀～一二世紀前半）
- 三、平安時代後半 第二区分（一二世紀半ば～一二世紀末）

小結

#### 第二章 鎌倉時代の絵画の絹目

- 一、鎌倉時代前半から半ば 第一区分（一二世紀末～一三世紀半ばすぎ）
- 二、鎌倉時代後半 第二区分（一三世紀後半～一四世紀前半）
- 三、屏風と絵巻などの絵絹

小結

#### 第三章 南北朝時代以降の絵画の絹目

- 一、南北朝時代
- 二、特異な関心を惹く作品の絵絹―〈神護寺三像〉の場合―
- 三、室町時代以降

小結

まとめ

### 第二部 各論

#### 第一章 真言七祖像の基底材の構成に関する試論

はじめに

- 一、五祖像の絹継ぎとその組織
- 二、二祖像の絹組織
- 三、七祖像の書との関連

小結

#### 第二章 五大力菩薩像の基底材と制作年代論

はじめに

- 一、金剛吼菩薩幅
- 二、龍王吼（無量力吼）菩薩幅
- 三、無畏十力吼菩薩幅

小結

#### 第三章 阿弥陀三尊及び童子像の基底材の検討

はじめに

- 一、これまでの基底材への言及
- 二、阿弥陀如来幅
- 三、観音菩薩・勢至菩薩幅と童子幅

小結

#### 第四章 中国・宋代仏画の絹目

はじめに

- 一、北宋仏画の画絹
- 二、南宋仏画の画絹―その一―
- 三、南宋仏画の画絹―その二―
- 四、宋画の広絹使用をめぐって―日中の差異―

#### 第五章 日本の広絹の作品と文献にみる調査事情

- 一、史料にみる古代の絹中の制定
- 二、大元御修法用の広絹
- 三、中世の当麻曼荼羅の広絹史料

#### 第六章 絵絹以外の平織の基底材

- 一、〈平織〉を用いた絵画作例
- 二、〈平織〉使用の意図
- 三、浄土寺本「仏涅槃図」と二点の「文殊菩薩騎獅像」

総括

図版

絵絹総リスト 参考文献 あとがき 索引 英文要旨

## 【カラーページ見開き図】



### 国宝四〇件・重要文化財七八件を含む

#### 一五〇件一九四点の絹目画像を掲載



拡大図 (60% 縮小)

**著者略歴**

泉武夫（いずみ・たけお）  
 東北大学名誉教授・京都国立博物館名誉館員  
 一九五四年生まれ。東北大学大学院文学研究科博士課程後期中退。博士〈文学〉。  
 大阪市立美術館学芸員、京都国立博物館研究員、東北大学大学院文学研究科教授を歴任。  
 専門は仏教絵画史。

**主要著書**

『国宝 釈迦金棺出現図』（京都国立博物館、一九九二年）  
 『絵は語る2 仏涅槃図』（平凡社、一九九四年）  
 『仏画の造形』（吉川弘文館、一九九五年）  
 『躍動する絵に舌を巻く 信貴山縁起絵巻』（小学館、二〇〇四年）  
 『国宝 六道絵』（共著、中央公論美術出版、二〇〇七年）  
 『仏画の尊容表現』（中央公論美術出版、二〇一〇年）  
 『竹を吹く人々―描かれた尺八奏者の歴史と系譜』（東北大学出版会、二〇一三年）ほか